

追悼  
藤本敏夫

追悼 藤本敏夫

発行日：2003年8月16日

発行責任者：「藤本敏夫さんの一周忌に集う会」実行委員会

「藤本敏夫さんの一周忌に集う会」にご参集いただきありがとうございます。同じ時代に同志社大学の学友会運動に取り組んだ仲間として、彼の足跡を簡単に振り返りたいと思います。

私たちは一九六三年に入学しました。六〇年安保闘争は終焉し、日本の学生運動は疲弊の極に達していた時代で、同志社でも自治会室はがらんどろの状態でした。春に原潜寄港反対の全学ストのための学生大会を開きましたが、学生が集まらずに失敗しました。そんな低迷の時でしたが、六三年度生からは彼をはじめ多くの活動家が生まれました。

学費値上げ反対闘争、学生会館の管理運営をめぐる闘いなどで、学内での強固な基盤を形成する一方、原潜、日韓、ベトナム反戦などの闘争の盛り上がりのおかげで、全学

連が再建されました。それが前半とすれば、その後、三派全学連は崩壊。七〇年に向けて全国で火を吹いた全共闘運動、そして、反帝全学連の結成が後半になります。ここでは彼と共に闘った前半を振り返ってみました。

六三年度生らのエネルギーは、後半の学費闘争に結実し、全国的にも運動復活の先駆的な役割を担いました。

そんな中、藤本君は六四年の文学部自治会選挙に立候補、自治委員になりました。同年春、私が学友会委員長になり、彼は一〇〇周年委員長として学友会常任委員に参入しました。その年、全学連再建に向けて都学連再建準備会が動き始め、関西でも準備を始めた時期でした。

同志社では六三年から六五年にかけての学

園闘争で、学内に確固とした基盤が出来ました。それは政治闘争にも波及し、京都府学連の大動員デモ、関西ブントのヘゲモニーによる三府県学連統一行動が度々行われ、全学連再建に向けての強力なバックボーンとなりました。

六六年に全学連が再建され、私はその副委員長と京都府学連委員長を兼ねることになりました。同志社の大衆運動指導者として学園闘争と政治闘争とを政治理論的に論理化しなければならなかったのですが、それが成されないままに東京に行ってしまったのです。

街頭デモは関西では大学単位で構成されていましたが、東京ではセクトごとのデモで、集会ではゲバルトの明け暮れでした。そんな中で早稲田や明治でも学費闘争、中央での学館闘争などを通して、政治闘争昂揚の機運が盛り上がってきました。

しかし、大衆闘争そっちのけの党派闘争の渦中に入った私は、私自身の論理化の遅れ、ブント

の政治論的未成熟により大きな理論的ギャップを背負うことになりました。

この限界を藤本君や六四年度生以降の後輩は佐世保でのエンブラ闘争、全共闘運動で乗り越えていきました。六三年から蓄積された同志社のエネルギーが、七〇年に向けて全共闘運動と反帝全学連という、藤本君を頂点にして全国展開された運動の中心となったことは誰も異論のないところだと思えます。

しかし、彼も戦線を離れる時期が来て、学生時代の「思い」を社会人としてどう実現していくのかという、これもまた困難な戦いを始めました。農業を通じていろいろなメッセージが発せられ、さらに多くのメッセージを発しようとしていた矢先の夭逝でした。

去年の春、妻と見舞いに行った時の病室で「書きたいんだ。」と言った君の言葉が残ります。書き残した無念の思いがあつたらうと思われま

しかし、君のやり残したことは田中正治さんが引き継ぎ、乗り越えていくとの決意表明がありました。

人間関係を大事にした君らしく多くの人脈が遺産として残り、君がやり残したことを引き継ごうとしています。

これからどうなるかは、酒を飲みながら待っていてください。そのうち、ぼちぼちそっちに行きますから。

それぞれどう生きたか、飲みながら話すのを楽しみにしています。

二〇〇三年八月

僕たちは、君がやろうとしていたことを乗り越える。  
それがぼくたちの闘いだ。 追悼 藤本敏夫

田中 正治

田中正治です。藤本さん、そつちではどうしていますか。一九六〇年代の嵐の中を一緒に闘った者として、君の喪失を心から残念に思う。君は本当によく闘った。最後まで、最後まで、本当によく頑張った。

死ぬまでつきまといつている。恐らく君もそうであつたらう。

死の直前、四日前に会った時に、虫の泣くような声で僕たちにメッセージを伝えてくれたけれども、その時の内面から発する情熱と、その論理的な一貫性、論理の精緻さというものに僕は驚嘆しました。最後まで君は社会革命家として生きようとしたのだ。僕は今、つくづく、そう思っています。

一九六〇年代、学生運動、共産主義者同盟、その同時代を生きた僕として、あの時代の敗北は、今でも苦しく、総括しきれないものとして、一生

僕はそれなりに、自分を納得させるような論理を二応は作っている。ブルジョア革命が、資本と国家と農村共同体を統一した後の先進資本主義社会においては、暴力で国家権力を奪取し、プロレタリア階級の独裁を梃子として社会革命を遂行し、共産主義的共同体をつくるという方法は、資本、国家、村落共同体の強固に統一した社会構造の前に敗退を余儀なくされる。そのことを、我々は身をもって証明したのだ。従って君も僕も、それ以降、革命の方法とそのコンセプトを模索しながら転換してきた。ただ君は転換した時期が非常に早かった。

一九六九年の四月、多分六〇年代、最後に会った日、大阪だったが、その時君は赤軍派との内部闘争に敗れて、関西に帰ってきた。そして数

旧い共同体に対しては非常に否定的であった。

日後、姿を消した。どこへ行ったのか、僕はすう／＼と知らなかった。数日前、登記子さんに初めて聞いたのだが、長崎の平戸にいたということだった。我々の共通の先輩の中島さんのところにいた。そこで君は恐らく自分の人生の大転換をした。何らかの示唆と体験を得たのだと僕は思う。それ以降君の活動は、一九七〇年代以降、現在の工業文明の崩壊と、それを揚棄するところの農業というもの、命というもの、そういうものによつて人類の方向性を切り拓こうというような啓示を、得ていたのだと僕は直感した。

七〇年代の初頭から農業という問題に対して、君は著しくこだわることになった。決定的にそれで社会が回転するような世界観とコンセプトを模索し続けた。今では、そのような模索を、なぜ君が続けたか納得することができない。君は

一九六〇年代同志社大学で鶴見ゼミにいた頃、共同体というものに対して強烈にこだわりを持っていた。共産主義も共同体を目指す運動であるが、しかし、今から見ると君は、共産主義的共同体というよりは、もつと違った共同体を、ピタシくるものとして求めていたのではないかなあという気がする。

それは、閉ざされた共同体ではない。君は開かれた共同体の実現に希望を持っていた。人間の共同的な行為、コミュニケーションを模索していったように思う。だから「大地を守る会」での活動、あるいはそれ以降のアファス（農業食品監査システム）、IRMの活動、あるいはネフコ（Natural Ecological Farm Company）の活動など、七〇年代から八〇年代に、次々と展開していった君の活動は、すべて開かれた共同体、一つの社会革命を求めた方向性を模索して、実践形態

に結びつけたのではなかっただろうか。しかも、従来我々がやってきたような運動という形態ではなくて、むしろ事業、つまり経済的な行為、経済的な活動を媒介したところの社会革命をやる以外にはないということを恐らく直感していた。それが開かれた共同体の実態であると君は思っていたように、僕には思える。

藤本、お前は本当によくやったよ。だからお前がやろうとしたこと、実現しようとしたこと、それがどのように実現されるか、みていてくれ。そして現実によってお前の主張がきつと乗り越えられると僕は思う。

僕はそのために闘い続けるつもりだ。

ありがとう。

僕は、恐らくずうつと思っていたのだが、国家とか資本とか古い共同体に対するスタンスの取り方において、僕は君とは多少違っていた。しかしそれよりずっと多くのものを共有していた。なによりも僕が気付く二〇年前に、すでに現在の農業の問題とか文明の問題に対して君が提言していたということを、一九九〇年代の初頭に、始めて僕は気が付いた。

一九七〇年以降、君の三〇年間の主張は極めて一貫していたということを、最近の君の本を読んで思い知らされ驚愕しているところだ。

二〇〇二年八月

## 個と共同 ― 追悼 藤本敏夫 ―

前田 良典



藤本敏夫の足跡は二回生の新聞学研究会(鶴見ゼミ)とそのフィールドワークとしての大倭教・紫陽花邑(おおやまときょう・あじさいむら)のらい(ハンセン)病社会復帰センター「むすびの家」建設運動および山岸会の研鑽、そして自分の大学寮である此春寮の先輩神学生との「個と共同」＝宗教論議で鍛えられ、三々四回生でベトナム反戦と安保反対の全国学生運動・結婚・出獄後の大地の会・自然王国という流れであり、どうしても「共同体」概念がつきまとう。大倭教むすびの家と山岸会は鶴見教授の助言もあつて藤本の三級先輩の柴地則之が六〇年安保闘争敗北後その道(フィールドワーク)の場を開いていた。柴地は子供の時に、宿屋であ

る自分の家に警察に追われた山岸会会長…山岸巳代蔵が身を寄せたことから共同体に関心をもち、学生になってから山岸会と大倭教に入りした。後に大倭教の器量・柔軟さという回復者ホームの建設に土地を提供した法主の矢追日聖とのきずなから大倭に身を寄せた。

法主の矢追は自分の家系を「国津神の末裔」として、若い時に心酔していた渡来神の「天津神(国家神道)」に對置して敗戦の年(一九四五年)に大倭教を立教(設立)していた。この地祇…古神道の大倭教の中に「らい回復者ホーム」が建設され、その一端を担ったのがFIWC(クエーカーの学生たち)であった。この混成の運動の柔軟さはおもしろい。クエーカーは兵役拒否等絶対平和主義で、FIWCのWはWORKでクエーカーの創立理念ではWORKのことを「言葉は

人をへだて、仕事は人を結ぶ」としている。藤本が千葉の鴨川で自然王国を作る時に手作業で汗にまみれて仲間と小屋を建ち上げるのは全く同じ手法である。

藤本が二回生で入寮した元神学生の寮：此春寮の先輩達は六〇年安保闘争を経て、六四年神学部教授会と大学当局に対して寮を他学部生を含む一般寮化の闘い：「開放闘争」に着手していた。内部では主流のバルト神学に対してイエスを史的存在として見直そうというブルトマン神学が対置され、寮開放闘争の教授会団交・神学館チャペルでのハンスト戦術抱き合わせの激しい論争が展開されていた。藤本もこのチャペルのハンストに参加した。此春寮では以前から岡山の長島らい患者愛生園への勤労奉仕団や福井地震被災者支援団を先輩から後輩へと代々受け継いでいたが、この一般寮化闘争と神学論争：「空中戦」の中で「共生」の観点からイスラエルのキブツ共同体の研修に行く者も出、

じで、それもバクられた時は多くの仲間が警察署を取り囲んで応援してくれるが出所の時は一人しよぼしよぼ雨の中をトレンチコート片手に帰ってくるという孤独なイメージだった。私は社会人になってから勤務先を首になり解雇撤回闘争で裸踊りをするはめになるが、学生の頃は委員長になるといのは人格的信頼が必要だが、割の合わない役廻りだと思っていた。自分で裸踊りをしてみて藤本はようやったと思う。

「共同体」運動と空中戦を経験した藤本から出てくる方針は楽しいものが多く、多くの仲間が共感し行動を伴にした。しかしこれは大学一〜二回生で培われたものというより彼自身が子供の頃より持っていたキャラのようである。しかし片方で、藤本の方針はオムニバス型と言おうか一話完結型が多くTPOで全く違う方針が出てきて仲間とはまごいあるいは梯子をはずされた思いに陥ることもあった。中には笑って済ませないことも幾つかあるようだ。学生運動

又「神は死んだ」として無政府主義、社会主義を言う者も出た。

「ブルトマン神学」派はその後の「死海文書」の「発見」（本当の発見は一九四七年、ペドウィンの羊飼いの少年によつて）もあつて原始キリスト教と既存のキリスト教の違いを益々鮮明にして行く。この闘いの中心になった先輩達はすべて牧師の道からはずれて社会運動家の道を選択して行った。

藤本がこうした地を這う「共同体」運動のフィールドワーク：ゼミの特講と信仰の空中戦から、折しものアメリカのベトナム侵略とこれに協力する日米安保に反対する学生運動に合流するのは自然の流れだった。後に府学連書記長・全学連委員長という孤独でしんどい役廻りができたのはこうした二〜三回生の活動がベースになつているし七〇年闘争の出獄後に健康・食・農から再出発するのもそれがベースになつている。当時の委員長役というのはバクられ役という感

によくあることと言つとそれまでだ。

ここら辺りの対処法は登紀子さんの領分だろう。登紀子さんのことを若い頃はキャピキャピの歌い手さんくらいに私は思っていたが、島成郎さん葬送時にその器量と論理は立派なものを見直した。気難しい藤本によつて連れ添つたと思う。藤本には全く過ぎたる連れ合いだ。

78年	74年	72年	70年	69年	68年	67年	66年	65年
3月	9月	4月21日	3月	1月18日	4月28日	10月8日	7月	7月
成田管制塔占拠闘争	出獄	下獄	よじ号	安田講堂 沖繩闘争	反帝全学連委員長 日大闘争	10・8羽田闘争	全学連(3派)再建	府学連書記長(大学3年)
		浅間山荘	日本キネマ文化交流研究所	(11・7逮捕)69年6月まで拘留	佐世保エンブレ	直後から上京、明大を拠点に活動		
			望月上史君死亡事件		4・28神田カルチエラタン			

今更乍らで老人の繰言になるが、ここで死んでしまった子供の歳を数えてみようと思う。

六七年一〇・八闘争より六三世代の藤本は上京し明治大学を拠点に活動する。それに先行して六・六二世代の我々は六五〜六六年と日韓・ベトナム闘争を闘い乍ら全学連再建に取り組んでいる。六五〜六六年当時の関西の我々には学生大衆運動の実績(蓄積)があり、東京での闘いや組織戦にも勢いがあつた。いわば「勝ち組」で「肩で風を切る」勢いであつた。

しかし東京へ行くくと私にはいつも付きまとう思いがあつた。東京のメンメンの言葉を「みずみずしさが無い」「枯れている」「響かない」「砂を噛む思い」「博打」という感覚で受け止めていて、何でやろうと言う思いであつた。当時は「全国政治はシビアなものだ。関西は甘い。」くらいに思っていたが、後で「いや、あれは学生大衆運動の蓄積の違いが原因だ。」と思うようになった。蓄積の違いは二つの街頭政治闘争の積み重ね

であるが、それにも増して学内闘争の蓄積の違いが大きなファクターだと今になって思う。加えて、関西はセクトと言つても代々木とフロントくらいとのせめぎ合いで余計なエネルギーを割くことも少なかつたが、東京は六〇年以降セクトのせめぎ合いが先行し学生大衆運動はその後の如き状況の違いも大きい。後の日大・東大全共闘の爆発に対して不十分ではあるが第二次プリントがコミットできたのは、こうした関西と明治・中大での学内闘争の蓄積がある。当時の学生戦線の中での我々内部の組織展開：舞台の回し役は新開純也・田中正治さん等であり我々の世代はパシリ役であつた。三派全学連が結成されて世代交代となり、六七年以後の大舞台の学生戦線回し役が塩見を中心にした六・六二一年組になつた。私個人は学生戦線を離れた。

六七年一〇・八羽田闘争から六八年二月佐世保エンブレ闘争、日大・東大全共闘への激動、六

八年後半から六九年にかけての所謂「壮大なゼロ」の闘いから赤軍の結成への流れは第二次プリントが内包していた問題を抜きにすれば(単に学生運動として見れば)よくわかる。分派・分裂の原因は既にプリント内部にあつた。私は分派・分裂が納得できないし東京で何が起きているのか全くわからずだったが、今になって関西同世代の顛末がずいぶんわかつてきた。私は以前にも少し言及したが「壮大なゼロ」からその局面の打開(過渡期世界論と七・六事件、そして七・二五事件後の望月の死)がもたらした結果は我々の器量を超えたものであり、自らももたらした結果(状況)そのものを主体的に切り開こうとして転倒が起きたことがよくわかる。それまでの「組織された暴力」が「軍」になり、「プロレタリア国際主義」が「国際根拠地」へと変化した。打開した状況は開かれた地平の反作用によって全体を統合していた方針が本来と全く異なる対症療法の方針へ連続的にすり替わって行った。我々

のどこからビョンヤンが出てくるのか、当時の私にはさっぱりわからなかった。我々は自分達の闘いの結果を通して毛沢東路線を機械的「唯物弁証法」と見ていたしビョンヤンの政の無い民族社会主義：唯軍主義をミニ毛沢東と見て、それが我々世代の共通認識と想っていたからだった。

私の闘いを八〇年に終えて年月を経て振り返る度に、ますます思うのは「私の闘い」という解雇撤回闘争も実は「私の闘い」ではなく極めて「公」の闘いだったと思う。同時に全学連再建から七〇年安保闘争への闘いも全く六〇年ブントの闘いの上にあるということ、戦後学生運動の蓄積の上にあることを思う。それは我々が学生の頃によく話したロシア革命が一九〇五年〜一九一七年のスペインではなく、ヨーロッパ列強に後して誕生したロマノフ王朝：ロシアインテリゲンチヤの宿命と不可分であり、わけても数多くの死刑者とシベリア流刑者を出した二八二五年のデカブリストの乱や後のナロードニキ運動の蓄

積の上にあることを思うのと同じことである。

「政治力学と戦術」というブント関西の六〇年総括理論である「政治過程論」は六一年以降の関西のメンメン（とりわけ六〇年安保後の六一・六二年組）のDNAに込み込んでいるようだ。それは第三期論にしろ過渡期世界論にしろ装いを変えた政治過程論であり、果ては神田カルチエ中電マツセンスト・赤軍派の誕生もそうであるように思う。

六〇年を知らない六二年・六二年組の我々は六〇年安保闘争を戦った先輩達に敬意を抱いたが、彼らの言葉の意味を慎重に配慮し噛み砕き理解することを怠った。ブント中央（PB）のメンバーの発言を「また、ふるしき広げとるわ。」としてろくに聞きもしなかった。PBのメンバーも、例の組織スタイルでそれを許容した。六一・六二年組には実際の府学連・三府県統一行動は自分達がやっているといるという思いであり、関西の波が東京へ行き六六年全学連再建も我々がやったとい

う考えであった。この組織問題は後の七・六事件と赤軍派分裂のベースとなっている。片方で現場前線部隊と、片方で綱打ちの「綱領委」という組織の構造は七・六で田原氏が関西から指示を出すという構図となった。何故なのか？

六七年二〇・八から佐世保エンブラ闘争まで昇る太陽のような闘いから激動の日大・東大・全国全共闘を経て、じりじりと突破できない壁に直面する闘いになり、結集数は膨張するが展開を阻まれるという事態になっていった。ブント系の中心メンバーの中に「壮大なゼロ」とシニカルに表現するいらだちが広がって行った。しかし、それは自分達が全共闘の闘いを深耕できなかった裏返し表現でもある。それは現場最前線で戦う部隊から始まり、その部隊から赤軍派が誕生した。しかし誕生した軍は裸の軍であった。「軍」として分派・分裂する「状況」とはどういう状況だったのか？

動でもある）は無く、軍が政であるという転倒が始まった。関西では六九年の七・六事件に關して「赤軍派がブント議長をリンチにし、拉致して途中で路上に放置し、議長は権力にバクかられた。日向派は革マル主義だ。」との情報が流れて来るが、東京で何が進行しているのか実際のところ霧の中であり、全ては疑ってかかる必要があった。

その後の七〇年型大衆武装闘争を継続して戦ったのは六五世代である若い日向を中心にしたブント戦旗派であり、彼らがブントの継承者であるというのは結果が語っている。彼らが何を主張して何処に到達したかは知らないけれども、七八年の成田管制塔占拠闘争を頂点とする七〇年代〜八〇年代の沖繩・三里塚・サミットに対する闘いを継続して戦い抜いたことでその資格は充分である。その後のことは又別のことである。

軍があるなら政もあるはずだが政（＝大衆運

六八年後半から六九年安田講堂へ、じりじ

りと後退する局面で藤本は政府の軍事外交に  
矛先を向けるという防衛庁闘争を闘い逮捕・  
拘留となり六九年六月に出獄してきて間もな  
くの七・六事件だから泡食ったことであろう。

塩見を中心にして展開された「世界二国同時  
革命」―「国際根拠地」―「民族自主」の流れは、  
それ本来のスキームが内包する欠落を順次補  
完する流れになつている。順次補完というのは、  
当初の「世界二国同時革命」論が根底的に孕む  
誤りを正すのではなく、それが持つ欠落を对症  
療法的に順次補完したということである。根底  
的な欠落は縦軸(過程としての階級)であり、  
即ち党と階級形成である。組織問題は当然即  
戦略問題に連結するが、ここでは触れない。この  
流れを逆にたどることで、それ本来がもつ欠落  
の体系が鏡に写し出される。即ち、それは六九  
年―七〇年プレファシズム段階(過度期世界論)  
で我々の前段階武装蜂起によって世界ブルジョ  
アジー打倒の戦いが始まるという「こと」であり、「線

主観的意図はともあれ政の無い軍の中軸が我々  
六二・六二年組であるのに比べ、上の世代と同時  
に下の世代になるほど「政」と「展開性」が復  
活する。若宮赤軍や重信赤軍に「政」と「展開性」  
があるのは何故なのか?とりわけ経験と言葉  
足らずが惜しいが若宮赤軍はである。当時の分  
派闘争の文書を後で断片的に目にすることに  
なるが、我々の世代の方に「深さと広さ・展開力」  
が無い。やったことの「責任を担い」切ろうとし  
たが、あるのは左脳のロジックばかりである。そ  
してその器量の狭さは八〇年から九〇年の時  
代の転換に対応出来ない体系であった。リッダ  
闘争の準備でレバノンに行き昨二〇〇二年三月  
三〇日(パレスチナ土地の日)に日比谷公園で焼  
身自殺した松森君の遺稿に「ブント田原理論の  
再評価を」とあるが、我々の世代は六〇年代後  
半当時に田原氏の口述を「ふろしき」として聞  
き流していた。田原理論が我々のレベルを超え  
ているのはわかつていたが、双発ジェットに例えれば、

り返される敗北と「勝利」をくぐり抜けて我々  
の党と階級形成(組織的陣形)が進むという過  
程を欠落させたスキームになつている。我々の側  
の階級形成とその陣形も指定されず、プロレタ  
リア階級の権力の掌握と国家の統治、対世界ブ  
ルジョアジー(米軍)と東アジア民族の階級と国  
家の連携も指定されていないものであった。

在ったのはジャコバン(政治過程論)的戦術が  
同時的に対権力の世界性を獲得するかの如き  
革命的ロマンの夢想であった。「世界二国同時革命」  
の「二国」が、その体系が持つ戦術的且つ平面的  
指定を更に鮮明にするものとなつている。

この未熟な革命的ロマンの夢想が民族社会主  
義：唯軍主義の「主体思想」「毛沢東思想」に  
包摂されることとなつたファクターであり、同時  
にこの夢想の中にある中央権力闘争とマッセン  
ストの都市型戦術体系がそれを阻んだファクタ  
ーになつている。

それは「片肺である。」として六〇年の遺産を  
学ぼうともしなかつた。「政治過程論」がレベル  
アップして「党と階級形成論」として展開され  
た憶えは無い。私一人がアホー鳥なのか?六二・  
六二年組が聞く耳をもたなかつたからか?

とまれ、六九年の最も大事な時に八〇年へ向  
けた説得性のある「戦略論(綱領)」「党組織論」  
「国家論」はブント内の何処にも無く、結果と  
してブント総体の力量不足が七〇年闘争を分  
解させた。

党派(政治的戦略的ヘゲモニー)を拒否し、全  
共闘に収斂させると言う「党と国家」を峻別  
しない独立派は論外であるし、同時に階級戦  
争を呼号して「武装闘争を容認するか否かが  
革命派か否かのメルクマールだ。」と言うのも自  
らの政治的戦略的ヘゲモニーの無さを証明する  
ものであり論外である。双方は一見対極にある  
ように見えて実は共通のカテゴリーにある。問  
題は政治的戦略的ヘゲモニーの内容であり、プロ

レタリアートの階級的成熟(団結)の度合いである。

「」まで書いて、後悔の思いが湧いてきた。○  
○派・××派という時代は既に終わっているし、それに所詮結果論であり、私の放言でしかないし、たどれば疑問点が益々湧いてくるからである。解雇闘争の中で忘れてきたもの(蜘蛛の巣の中のルカーチ)が唐突に飛び出してくる。皆、墓場まで持つて行ってしまうつもりなのか? 六五〇六六年に明治や早稲田であんなにバカ騒ぎしていた我々六二・六二一年組が未だに「お互いに顔も見たくない。」関係というのは悲しい。皆、いい奴なのに。「青春グラフィティ」はやめよう。俗世は移ろい易いが「石持て打たれる身」(マルコ伝)になったという基本認識は必要だし、更なる見極めは後回しだ。我々の世代も藤本の世代も前線に身を置き、責任を負い、又担い切った。裁くのも、継承するのも若い世代だ。

「御上」「手が後ろに回る」「前科者」などと恐ろしい世界のように獄と戦場のことを言う。古来、日本の権力は渡来の天津神として民衆のはるか天空に居丈高に聳え立ち、民はつましく統治し易い。獄と戦場とシヤバとの往来は目に見える三八度線の如き非常線とは違う。俗世の事件・災難で突然に戦場に放り込まれ、狂気の世界をくぐりぬける様は全くシビアで凄惨である。我々はおつと地上と地下を往来し、この世の境界の何たるやを知る必要があるし、また明らかにする必要がある。

私はこの文章で「党と階級形成」について言及した。「過程としての階級」と言うのは当然戦略問題にリンクしている。書いた言葉は過去の左脳のロジックとは位相を異にする一見毒にも薬にもならないような世俗人の言語であるし、不可能に近い思い上がりだが、同世代としての共通の言語を取り返すための幾つかのメタファ

三

76年	3月	大地を守る会
81年		農事組合法人・鴨川自然王国
82年		政党「希望」で参議院議員選挙
95年		農産物需給研究会(GLS)
97年		農業食品監査システム(AFAS)
99年		農水省関東農政局諮問委員
01年		IRM研究会 (持続循環型社会の推進)
02年	5月	建白書
	7月31日	死去(58歳)

引き潮と時代の転換で獄舎と戦場から帰還した者と話す機会がある。私自身は六九年からあやしくなり七二年に解雇され二〇年近い解雇撤回闘争をすることになるが、どちらが獄舎なのかどちらが戦場なのか何度も考えさせられた。その後二〇年の市井を生きて、この俗世はシビアだと思う。つましい人々は災難に遭うまでは「身を削って」「他人を恨まず」「御法度

」を入れた。

その後の時代の動きはそれさえも紙屑・亡霊にしつつある展開であるが、上の世代と我々の世代の何人かはそれらを紙屑・亡霊にはせず、ダブルスタンダードで今も院政を敷いている。現実の深奥は、それを必要としているということであろう。しかし上皇たちの言葉は硬直し、位相の異なる言語に目は届かず、ましてメタファなど気付きもしない。映画「神々の深き欲望」のシーンが甦って来る。

とまれ、八〇〇九〇年にかけて時代は大きく転換した。多国籍企業による地球の寡奪・ベルリンの壁の崩壊と世界単二市場の誕生・瞬にして地球を駆け巡るサイバーマネーの時代にはいった。日本型システムの崩壊と再編が地域社会に企業社会に国家システムに限なく押し寄せている。

藤本は獄中の体験から、健康・食・農に注目し再出発した。「大地の会」から「自然王国」の過程は彼の大学二〜三回生当時を髣髴とさせる。藤本は八〇〜九〇年にかけて砂漠化する都市と農村で、現代人の健康・教育・レジャーに目を向け「農業を生活化し、生活を農業化しよう。」「生活を健康で楽しいものにしよう。」と言った。グローバリズムはバイオ技術を巨大世界資本の商品として食と農を根底から変革し占有しようとしている。カジノ型サイバーマナーで世界を占有し収奪しようとしている。それに対し藤本は「有機農業」を言い「地球的地域主義」を言い、現代人の「農的生活」を呼びかけた。農なくして「共同体」は有り得ないという当たり前のことを繰り返し展開している。当たり前でない現実が進行しているからだ。

藤本が残したものを読んでいてびつくりするのは現代社会の落とし穴である土地所有・労働力・信用の解体と占有に対する地域化(共同化)

#### 四

ヨーロッパ遊牧民族の個≡individualとアジアモンsoon農耕民族の個との間には同じ言葉でも概念として大きな違いがある。古来、略奪・虐殺・支配・隷属等人災との闘いを主にしてきた麦の風土と水難・旱魃等天災との闘いを主にしてきた稲の風土の違いであろうか。

個≡individual(もともと「分けられない」と言う意味)の概念がヨーロッパとアジアで違うということは、とりもなおさず共同体(ゲマインデ or コミュニテ)の概念も違う。それは「経済学・哲学草稿」から世界のマクロ的把握としての「帝国主義論」へというサイクルと片や現実的存在としての男と女、家族、生活と命の再生産のサイクルとのトータルティ(力)の違いでもある。

市井(俗世)に生きる者の理解として、前者のサイクル≡マクロ的把握を所詮「インテリ・学界的なもの」として切つて捨て、「アジア型の個と

を彼の感性で指摘し表現していることである。「地球的地域主義」「農的生活」がそれであり、「まんだらネットワーク」あるいは「タオ」は信用の地域化(共同化)に他ならず、これは沖縄の「ゆいまーる」・本土の「結い・ゆい」「頼母子講」につながり信用形態としての地域通貨にも通じる。「自然王国」運動がそれであり、その途上で彼は倒れた。

共同に長所が在る」として、元一橋大学長の阿部氏が「市井の調和・共同」を説いている。大東亜共栄圏のベースになった「隣組」と「村」ではなく、庶民の間の個の尊重と多文化共生を説いている。職場とか町・村とかの「小集団の平和」を説いている。

生産力と生産関係(私的所有)の矛盾：プロ独と計画経済(論)というカテゴリーを人間世界の外界へ一歩広げて生命系経済学(論)としてマクロを把握する作業も必要だが、「市井の共同」作業も必要である。

生命系経済学は景気循環で説く新古典派経済学や、よりカテゴリーを広げ人間社会総体から説くマルクス経済学でも足りないとして、人間社会が生物・地球・太陽と不可分なものとしてより広義の経済学が必要と説く。生命系を以下、①開放定常系の流れ(水・地球・太陽)

②増殖による種の保存(生物) ③共同主体的な社会関係(人間社会) の三重構造とし

①の中に②が、②の中に③が入れ子構造に入ると捉える。①②③のそれぞれの内部と相互間のエネルギーや熱や物質の拡散・移動を示す物理量を「エントロピー」で表し、地球を「生きている地球」と説いた。しかしこの物理系生命理論は③に対する、とりわけ環境問題・資源問題・南北問題に対する弱点から様々と見直されつつある。

生命系経済理論はレイチエル・カーソン「沈黙の春」や環境ホルモンの研究や耐性菌の増殖対策やDNA学が相互進歩の土壌となっている。一八一九C産業革命以後の近代社会の負の遺産は取り返しのつかない事態を招いている。先日も魚類・両棲類のみならず「人間世界でメスが進んでいる」と言う発表や「DNAは生物間で移動する(自然現象)」という研究発表があつたがさもありなんと思う。

現代世界は金と物と人の流れ(生産力)が最源を掌握し、第二次大戦でそれをアメリカが継承した。パレスチナの抵抗とアルカイダの九二テロはこの流れに対抗するものである。

世界はスミスやリカードが言う「商品の優位から経済特化・分業・自由貿易を」なる近代社会をリードした三つの概念が今や深刻な破壊(○億人余の飢餓)と衰弱(費用対効果の面でも然り)をもたらす時代に入った。

初期の生命系経済学が人間社会と生物の生命連鎖、地球・宇宙との熱や物質の相互移動を物理量で説いたことと人間社会の在りようを理想的な生活への転換としてドンキホーテの如き生活を説いたこととは表裏一体であり、如何にも理系の展開らしい。とはいえ、この広義の経済学は従来からのマクロ的把握(市場経済か計画経済かの二者択一)の持つ転倒を異なった角度から指摘することによって新たなマクロ的把握の可能性を指し示した。

生命系経済学は権力とは程遠い末端社会(南

早国民経済の枠組みをはるかに飛び越え単一世界経済として在り、アングロサクソンとユダヤの巨大資本がこの単一市場経済(投機サイバー経済)を支配し、A・A・L・Aを収奪し、飢餓と環境破壊を省みていない。しかもこの支配収奪「富の不公平な分配構造は北と南の間のみならず」「先進国」内部においても且つ又「後進国」内部においても拡大進行している。生命系経済学はその視野の広さからこうした現実の分析と対抗の軸として有効である。WTOに対するシアトルの大抗議デモやG8に対するジェノヴァの大デモはこの現代世界の流れに対抗するものである。「途上国債務の削減を!」「穀物の遺産伝子操作をやめよ!」「特許権・知的所有権の延長反対!」「地球は売りものではない!」と。

巨大世界資本(イギリス)は第一次世界大戦でイスラムに分断ファクター(イスラエル国家建設)を持ち込み、中東の分断支配によって中東の資

アジアでの地域経済)の経済分析から市場経済でもなく又計画経済でもなく、「協議経済」という未来型の経済社会を提示し、もってマクロ経済の転換をも指し示している。生命系地域主義とも言うべき中村尚司氏やポール・イーキンズ氏の提起がそれである。

こうしたマクロ的把握を阿部氏が「所詮インテリ・学界のものとして切り捨てる。」と言うのは思想家でもない市井に生きる者として高邁なことばかりを言っていると転倒しますよ、所謂「世間」||小集団の調和も大切ですよ、ということであろう。

富の分配格差は、地球規模で且つ又身近な地域社会で益々拡大しつつある。市井の共同が益々困難になりつつある。多文化の共生・環境と人権の闘いと並行して、それを支える基盤である生産の共同、即ち明治維新以降に権力によって取り上げられ(私的に専有化され)た土地・労働・分配(資本)を農・工・商・サービスの諸分野で地

域の共同システムとして組替える作業が必要である。この主要な担い手は「自立を抱いた個の集団」・NGO・NPOたちになる。中央権力の出先機関に成り下がっている地方自治体との共闘も射程に入れる必要がある。この闘いは様々な形で各地で展開されている。藤本の「自然王国」建設もこうした闘いの渦中にあった。

藤本の「自分史」メモに「現実との対話」というメモが何度か出て来る。彼が次々と繰り出す運動体・事業体は彼の言う「現実」の時空からの想念であり苦闘の証である。

疾走し過ぎだよ。己が身体もいとわずに。さらば、安らかに眠れ。早逝が惜しまれてならない。

二〇〇三年七月

私たちの「革命」はまだ終わっていない。

藤本 登紀子

一年が過ぎ、再び暑い夏がめぐって来ました。

今年には阪神が大活躍、藤本があの世界でもうれしそうに大騒ぎしている顔が浮かんで来ます。

どうしても速くに去ったと思えず、つい対話をしている私ですが、まだ今は答えてくれるような気がします。

一周忌が来る前に、と心急ぐ思いで「青い月のバラード」を上梓、「沖縄情歌」をレコーディング、長女的美亜子も結婚しました。

千葉県の鴨川自然王国も若い人たちが参加するようになり、無事なんとか活動を続けております。

この一年、私を支えた思いは、

「私たちの革命はまだ終わっていない」

ということだったと思います。

一九六九年、学生運動から身を引いたその時からはじめた「革命」です。

農業とは呼べないまでも農的 life を取り戻そうとした藤本の思想はいろんな形で現実化されようとし始めたばかりでした。

日本はどこへ向かっていくのか、方向は見えかけているのに舟は全くそこへ向かおうとはしない。この時代をどう生きればよいのか。むずしいことです。

「大風呂敷の藤本」がとりあえず広げていった点と線を何とかつないでいければと願ってはおりますが、私に出来ることは、そのほんの一部でしかないだろうと感じています。

私の知る範囲ではなかった生前の事業の中でさまざまに形を志をとともにされていた皆さまのご尽力に、心からのお礼を申し上げ、これからのご活躍をお祈りするばかりです。

今後ともどうかよろしくお願い致します。

二〇〇三年七月

藤本 大